



第 9 回日韓交流連絡会議報告書



主催：日本青年国際交流機構 (IYEO)

韓国青少年国際交流会 (KIYEO)

後援：内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室

韓国女性家族部

(財) 青少年国際交流推進センター

韓国青少年交流センター

目次

日韓交流連絡会議概要	2
IYEO 会長・実行委員長あいさつ	3
スケジュール	4
パネルディスカッション	7
パネルディスカッション講演録	8
分科会	19
分科会報告	20
第9回日韓交流連絡会議が目指したもの	25
アンケート	26
参加者及び実行委員	30

日韓交流連絡会議概要

日韓交流連絡会議の目的

「日韓交流連絡会議」は日韓両国の青年たちが、国際交流事業で得た日韓のきずなを再確認するとともに、培った経験と国際感覚をいかし、国と世代を超えて、長い期間での日韓交流ネットワークを構築していくことを目的とする。

単なる親睦会を超えて、両国の青年がディスカッションを通じ、価値ある活動を計画し、自ら実行しながら一般大衆との交流と友好を増進させる活動を展開する。

第9回日韓交流連絡会議テーマ

これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ

趣旨：交流事業に参加して得た経験（気づき）を基に、これから経験を活かした事後活動や自分たちの手で新しい日韓関係を作り上げていく（築き）ことを考える場とする。

主 催

日本青年国際交流機構 (IYEO)
韓国青少年国際交流会 (KIYEO)

後 援

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室
韓国女性家族部
(財)青少年国際交流推進センター
韓国青少年交流センター

開催日程

平成24年8月17日(金)～19日(日)

会 場

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立オリンピック記念青少年総合センター
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1



IYEO 会長・実行委員長あいさつ

日本青年国際交流機構会長
第9回日韓交流連絡会議実行委員長
大河原友子



日本青年国際交流機構
会長 大河原 友子

第9回日韓交流連絡会議が日本にて開催できる事を心より嬉しく思います。

内閣府の青年国際交流事業は1959年に始まりました。その中で「日本・韓国青年親善交流」事業は1987年に始まり今年で26年目となりました。

このプログラムは日本と韓国の友好の象徴として始まり、毎年日本と韓国の青年がプログラムを通してお互いの国の歴史、文化、伝統などを学び、現地の人々と交流する中で友情の絆を育み大変高く評価されている事業です。

内閣府のプログラムの素晴らしい点は、参加した事業に行くだけで終わらず、同窓会組織の基盤が日本全国及び、60数か国にあることです。自分達がプログラム中に学んだ経験を仲間と共に、広く社会に貢献していくことが可能なのです。

その素晴らしい事業のネットワークを大切にする為に始まったのが日韓交流連絡会議です。

今回のテーマは“これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ”としました。今までの経験や今後私達には何が出来るかをパネルディスカッションという形で討論した後に各分科会に分かれて、参加者が其々アクションプランを考えていくという流れになっています。参加者が具体的に国際交流事業に参加して得た経験を基に、今後の事後活動や、自分達で新しい日韓関係を作り上げていくことを考えていかれる良い機会になると思います。

両国の青年がディスカッション、リクリエーションなどを体験しながら共に交流を深める事で、日韓のネットワーク構築、グローバル青年リーダーの育成の場となる事を期待しております。

最後になりますが、ご尽力いただきました両国政府及び関係者全ての方に感謝申し上げますと共に、本会議の成功の為に全力を尽くしたいと思います。

スケジュール

8/17 (金)

時間	プログラム
14:00-17:00	参加青年受付
15:00 or17:00	オリエンテーション
17:30	再集合、チェックイン
18:30-20:00	夕食会(立食形式)
20:30-21:30	アイスブレーキング、レクリエーション (動きやすい服装)



8/18 (土)

時間	プログラム
7:00-8:30	朝食
9:00-9:30	開会式
9:30-11:00	パネルディスカッション テーマ：「日韓交流で私たちは何を不得、何をしてきたか。 これからともに何ができるか。」
11:15-11:45	分科会についての説明 ・第8回日韓連絡会議アクションプランについて ・各分科会の趣旨説明
12:00-13:00	昼食
13:00-17:00	分科会 (1)新しい日韓交流プログラムの企画 (2)事後活動の「築き」
17:30-19:00	分科会発表会
19:30-21:00	夕食交流会



8/19 (日)

時間	プログラム
7:00-8:30	朝食、チェックアウト
9:00-11:00	共同制作
11:00-12:00	閉会式
	フリータイム
	参加者帰国(成田・羽田空港)





一日目 アイスブレイキング



一日目 夕食交流会



二日目 夕食交流会



三日目 共同制作



作品名「緑の未来連鎖」



三日目 共同制作



環境を大切に。エコバック制作



第9回日韓交流連絡会議実行委員



来年の日韓交流連絡会議でお会いしましょう！

パネルディスカッション

《日韓交流で私たちは何をverte、何をしてきたか。これからともに何ができるか》

第9回日韓交流連絡会議のテーマは、これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ。パネルディスカッションでは、パネリスト4名の日韓交流を通じて得た「気づき」とそこから「築いて」きた様々な活動を共有することで、会議テーマへの理解を深めると共に、分科会にて行なうディスカッションの土壌を形成することを目的とした。

パネリスト・コーディネーター紹介/토론자 코디 네이터 소개

これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ

지금까지의 "느낌"을 앞으로는 "발전"으로

酒井 洋幸

panellist



日本青年国際交流機構 顧問
日韓交流連絡会議 顧問

パク・ウン

panellist



韓国青年交流センター 主任

山崎 庸貴

panellist



日韓交流連絡会議事務局長

大河原 友子

coordinator



日本青年国際交流機構 会長

チョン・ジウオン

panellist



KIYEO 学生代表

パネルディスカッション講演録

コーディネーター： 大河原 友子

パネリスト： 酒井 洋幸、山崎 庸貴、パク・ウン、チョン・ジウオン



大河原:内閣府の青年国際交流事業は1958年に始まり53年目になります。「日本・韓国青年親善交流」事業は1987年に始まり、今年で26年目となりました。毎年、日本と韓国の青年がプログラムを通してお互いの国の歴史・文化・伝統などを学び、現地の人々と交流する中で友情の絆を育み大変高く評価されている事業です。内閣府プログラムの素晴らしい点は、事業に行くだけで終わらず、同窓会組織の基盤が日本全国及び、60数か国にあり、自分達がプログラム中に学んだ経験を、仲間と共に広く社会に貢献していくことができる点です。

その素晴らしい事業のネットワークを大切にするために始まったのが日韓交流連絡会議です。今回の日韓交流連絡会議のテーマは、“これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ”とし、今までの経験や今後私達には何が出来るかをパネルディスカッションという形で討論した後に各分科会に分かれて、参加者が其々アクションプランを考えていくという流れになっています。参加者が具体的に国際交流事業に参加して得た経験を基に、今後の事後活動や、自分達で新しい日韓関係を作り上げていくことを考えていかれる良い機会になること望んでいます。

それではパネリストの自己紹介をお願いします。

パク:2011年の日本派遣事業で副団長を務めましたパク・ウンと申します。現在は青少年交流センターの職員として日韓事業を担当しています。今回は個人的な経験よりも青少年交流センター職員としてのお話をしたいと思います。

山崎:2002年の韓国派遣事業に参加し、現在は日韓交流連絡会議の事務局長として活動しています山崎と申します。私の経験をシェアするだけではなく、分科会を通して皆さんの経験を話していただき、ともに学びあう機会になればと思います。

チョン: 2004年の日本派遣事業に参加したチョン・ジウォンと申します。現在は漢陽大学の機械工学科の4年生です。このディスカッションで私たちの経験や考えを伝えられる機会になればと思います。個人的にはご経験豊かな酒井さんや大河原さんのお話を聞き、学びたいと思っています。皆さんにとって午後の分科会で役に立つようなお話ができればと思います。

酒井: 奈良に住んでおります酒井洋幸と申します。韓国事業に限って申し上げますと1988年の第二回韓国派遣の副団長として参加し、2007年に団長を務めまして、この会場には多くの知合いがおります。

また、2009年に私の勤務先である奈良生駒山麓公園で開催された日韓交流連絡会議から、続けて4回参加させていただいています。日本と韓国の一歩も二歩も進んだ関係構築ができればと考えています。そのためには皆さまが一番の力になると思っています。

大河原: このような素晴らしい日韓通な方をお招きして、楽しく有意義なディスカッションになることを望みます。今回は4つの質問を用意しています。それでは一番目の質問としまして、「あなたが交流事業に興味を持ったきっかけは何ですか?」について具体的なエピソードとともにお聞かせ願います。

酒井: 今年はオリンピックイヤーなので、それに関連づけてお話したいと思います。第二回韓国派遣は1988年でソウルオリンピックがあった年です。48年前は、1964年で東京オリンピックが開催された年です。その時に世界青少年キャンプにボーイスカウト組織から推薦され参加して、多くの外国青年との交流の機会を得ました。その時初めて外国への憧れの気持ちを持ちました。48年前、私が19歳の時です。当時は派遣事業のことも知らず、外国なんて夢のまた夢、との思いで過ごしていましたが、大学を卒業した年(当時の派遣は学生には受験資格なし)でしたが、ボーイスカウト組織事務局を訪ねた際、内閣府(当時は総理府)派遣を勧められ受験し、派遣事業参加につながりました。22歳の時でした。

パク: 大学時代からオーストラリアワーキングホリデーをはじめとして、いろいろな国を旅行しました。初めての海外旅行は2001年で日本でした。その後、各国を旅行しながら、各国の青少年らと対話をしました。その時、自分の「考えの枠組み」をとりはらい、自分の視野が広がったと感じる良い経験をしました。以後、交流事業に参加する機会を探し、結局交流センターに就職することになりました。現在も交流センターで日韓事業を担当しながら、毎年訪韓する外国青少年代表団に会って、考えの枠組みをとりはらい、学べる貴重な機会を得ています。

山崎: 最初に国際交流事業に興味をもったのは大学2年生、19歳の時でした。大学時代に住んでいた仙台市が韓国南部の光州市と姉妹都市になるということで、市民訪問団の学生代表として初めて国際交流事業に参加しました。この時、韓国にとっても仲の良い友達ができたのですが、同じ年くらいの彼女がとても流暢に日本語を話し、日本文化についてよく知っていたことに強い衝撃



を受けました。一方、私は韓国語はおろか、韓国についてほとんど何の知識のない中での参加でしたから、もっと隣国の韓国のことを深く知らなければいけない、また日本についても知らなければならない、そう強く思ったことが、内閣府の「日本・韓国青年親善交流」事業に参加するきっかけとなりました。

チョン: 高校生の時から色々な青少年団体活動をしました。特に 2001 年度から文化観光部青少年委員会の委員で活動したが、そこで会ったある先輩(2001 年キム・ヒョンソン団員)と私どもの団体担当者であり 01 年度韓国派遣団団長だったユン・ヨンギ団長が、とても良いプログラムだと推薦をしてくれて、このプログラムを知りようになり、受験生活を終わらせた 2004 年にこのプログラムに志願して参加することになりました。

大河原: 4 名の方それぞれに交流事業に興味を持ったきっかけをお伺いしました。共通していたことは 20 歳前後の年に交流プログラムに参加したこと、若い時期に自国を出て他国の文化・歴史・社会に触れて学び、交流することによって、自分が気付かなかった様々なことに気づくことができた、そういう経験が今につながっているということです。若いうちだからこそ、得られる意味・重要性について、少し話していただければと思います。

チョン: 20 代前半での経験は私にとってとても大きな意味があったと考えます。以前は韓国だけを考えていて狭い世界に住んでいた私が、世界を周るきっかけになり、この交流を始め、オーストラリアワーキングホリデーに 1 年行ったり、国際会議や大会にも参加したりする機会になり、見聞を広め、視野を広げることができ、今後の自分の人生に役にたつと思います。この経験から、若い世代の人たちに海外経験をすべきだと勧めています。

大河原: さきほど、山崎さんが国際交流に参加し、自分に韓国の知識がないことが分かり、日本についても知らなければならないと思い、自国を見直すきっかけとなったと話されていましたが、それについてももう少しお話しください。

山崎: これは韓国との交流に限ったことではありませんが、海外の事を知ると異文化・異なった考え方に触れることとなりますが、その際に自分自身の基盤がしっかりしていることが重要だと思います。日本のこと、そして自分が何者であるのか、アイデンティティーをしっかりと構築し、その上で別のものを学ぶというのが意味があると思いました。

大河原: 海外で異文化に触れ、様々な体験をし、いろんな価値観に触れながら学んでいく、同時に自国のことも学んでいく、それが若いうちに、人間形成の途中でそのような刺激を多く受けることによって、視野が大きくなり、様々な事への対応力がつく、それが交流事業の良さだというお話だったと思います。それでは、次の質問に移ります。「交流事業に参加して、どのような経験をし、何を得たか？」を具体的なエピソードとともにお話しください。

チョン: 私が参加した当時の参加資格は渡航経験が一度もない人ということで、すべての団員は初めて飛行機に乗り、初めて海外に行くわけです。早めに空港に到着し、出国手続きも素早く済ませ、ゲートに集合する

予定でしたが、免税店で買いものに夢中になり、集合時間に来ない団員が多くいて、団員を探すために空港中を駆け回りました。空港スタッフも巻き込んで大変になってしまい、ニュースで報道されたくらいです。今では彼らも空港利用の達人になっていますが、、、。

皆さんご存知でしょうが、9月に日本団員が訪韓し、11月に韓国団員が日本を訪れます。日本団員が訪韓中の思い出として、独立記念館視察が挙げられます。私は日本に対して特に先入観は持っていなかったため、単純に観光する気でしたが、日韓の歴史観の違いを感じる場所でありながらも、お互いに本音で話し合う気持ちが生まれ、友情を築く貴重な時間になりました。また、日本派遣中には航空高校やマツダ工場などの施設を訪問することができ、機械工学を専攻している自分にはとても役に立つ情報を得ることができました。いつも後輩や他の人々に言っていることは、派遣を通じて日韓合わせて60人余りの同期ができ、一生を共にする仲間になれたこと、今も友情を深めていることがこの事業から得た最も大きなことです。

大河原:楽しいエピソードありがとうございました。ニュースで報道されたことも、この事業の宣伝にもなって、良かったのではないのでしょうか。

山崎:私は「交流の楽しさ」と「チームビルディング」の二つの視点からお話しします。まず「交流」についてですが、もちろん韓国に派遣され経験したことは非常に素晴らしく、満足のものでしたが、地元の仙台市で韓国人の受け入れをした時(2002年)の経験もそれ以上に有意義でした。日本のこともっと深く知らなければならぬという思いが強まり、宮城県の魅力をどのように伝えればいかに注力した記憶があります。自分がいつも行く場所を外国人に紹介する楽しさを知り、自分も宮城県をよく勉強しなければと思う、そういう視点から新たな学びがあったなと思います。

「チームビルディング」という点ですが、内閣府の派遣事業は、高度なチームビルディングと団体行動が求められます。一つのスローガンを作り、そのスローガンの中で様々な文化交流の準備を行ない、チーム内で役割分担をしながら準備を進めていく。その過程の一つ一つが、私にとってはとても良い経験になりました。私は派遣当時は総務係として、団のまとめ役、裏方として徹してきましたが、30名の団員の多くのアイデアやいろんな意見を上手く集約し、一つのスローガンを作ったり、文化交流のパフォーマンスを決めていくことは、難しいながらも非常に楽しい経験だったと思います。多様な意見に耳を傾け、自分と異なる意見も融合させて何かをつくりあげていくといった楽しさだったと思っています。この時の経験は、その後の事後活動はもちろん、様々な社会活動に携わっていく上で大きな糧になったと感じています。

大河原:パクさんからは交流センタースタッフとしての視点、副団長として来日したときの経験をもとにお話ししていただきます。

パク:去年の日本派遣事業に同行したことを振り返ると、本当に多様な経験をすることができ、良かったと思っています。青少年交流センターの交流事業担当者として感じたことを二つお伝えしたいと思います。一つ目は地域IYEOメンバーが地方プログラムに参加していることです。東京、千葉、愛知、大分の訪問では、政府とIYEOメンバーが共に誘致し、地域の特色をいかした素晴らしいプログラムを準備されることが、うらやましかったです。韓国では制限が色々あり難しいのですが、今は既参加者がプログラムに参加できるように改善しています。二つ目は日韓両国の青年の変化です。韓国では31か国と交流事業を行っていますが、

その中で日韓事業は時間をかけてつくるプログラムです。団員たちは自主的に準備をする青年たちの変化をみることができ、交流の成果だと思います。

大河原:副団長として日本に来られた時、既参加青年たちがプログラムづくりに貢献している姿に感銘を受けたというお話をしてくださいました。日韓事業は事前準備から皆が力を注ぎ一つになり、ただ楽しいという時間のみならず、今後の活動を見据えたプログラムだという話でした。

酒井:1967年第9回日本青年海外派遣団中欧班の一員として、西ドイツを中心とする中欧地域に派遣されました。そこで、世界は広い、日本は頑張らねばならない、特に青年の自分をもっと頑張らなければ！という思いに駆られる経験をしました。私が初めての飛行機に乗ったのは日本ではなくソ連でした。当時は、行きは船、帰りは飛行機というプログラムでした。ソ連を飛行機で横断しましたが、こんな鉄の塊が空を飛ぶのかと思った記憶があります。これは日本政府派遣が初めて東欧圏に入ったプログラムでした。一番の大きな経験、これがあって今の自分があるという経験を話しますと、西ベルリン(陸の孤島)で青少年育成に力を注いでいるユースワークを見て、心動かされ、この派遣がターニングポイントとなり、親の仕事継いでいた自分が職を転じるきっかけになり、青少年育成をライフワークとする今の自分を得ました。人生が変わるすごい経験をさせていただいたと思っています。

大河原:外国が夢のまた夢だった時代に海外に行き、しかも、初めて東欧圏に入る貴重な経験をし、自分をもっと頑張らなければいけないと感じたお話でした。最近は海外に行きやすくなりましたが、当時の状況で強い志を持たれたのはとても意義があることだと思います。青少年育成をライフワークとするきっかけを与えてくれ、現在も続けて交流事業をされているような、国際交流事業が人の人生を変えるターニングポイントとなった事例を紹介してくださいました。



また、パクさんも若い時の異文化経験によって、交流センターへの就職を決め、交流事業運営や青少年育成にかかわっているということを見ても、交流事業はそれぞれの人生に良い影響を与えているのが分かったと思います。

パクさんへ質問をしたいと思います。この仕事についてよかったと思う時はどんな時でしょうか？

パク:運よく、交流センターに就職でき、自分の好きな事を仕事にすることができて嬉しいです。交流の成果が短期間では分からない部分が多くありますが、継続的にその成果を見守ることができるのもこの仕事の良さかと思っています。皆さんも事後活動を一生懸命にされれば、交流事業の成果が短期間で出るようになると私は考えています。私は韓国に招へいされる外国青年に多く会います。彼らたちに良い経験ができるようなプログラムを準備し提供していますが、彼らからも多くのことを学びます。私が仕事のやりがいを感じる時は、韓国に招へいされた青年が韓国で多くの事を学び、韓国に対する良い印象を持って帰国され、韓国のファン

になってくれる時がとても嬉しく、やりがいを感じます。

大河原:本やマスメディアを通して海外について学ぶのと、実際にその国に行き学ぶのでは違いがあり、現地の方と触れあって、肌で感じ体験し、その国を知っていくことの大切さが、皆さんの実体験から伺えると思います。それでは、質問3に移ります。

交流事業に参加した経験を踏まえて、事後活動として何をしてきましたか？具体的なエピソードとともに聞かせてください。現在多くの海外派遣プログラムがありますが、行くことだけが目的のものが多く存在します。その中で内閣府のプログラムは事後活動を大切にしているところに特徴があると思います。全国に事後活動組織があり、事業終了後に皆さんの力をいかす場所があるということを紹介し、事業に参加していただいています。

では、皆さまがどのように経験をいかしているかをお伺いしたいと思います。

酒井:青年育成の仕事をはじめた時、私のお給料は3万円でした。国の国際交流事業経費が一人当たり約100万円だったかと思います。ヨーロッパ諸国に船と飛行機で行き、40日間滞在すれば、そのぐらいの経費になります。全額政府持ちの参加費で行かせていただいたので、その分はお返ししないといけないという責務を感じました。帰国後、次につながる人たち(参加者)への宣伝や支援、いい人材を発掘・育成したりする事後活動を進めていきました。当時、既に事後活動組織が出来ていたので、私は大阪青友会(当時の名称)の一員として活動しはじめました。その後、大阪事務局長と会長を経験し、近畿ブロック幹事を経験の後、本部役員として活動し、現在まで事後活動歴45年になりました。その間、70年の大阪万博開催の時、全国大会を開催し、今の天皇陛下を招き、私の職場であるキャンプ場を宿泊にするという運営に携わりました。また、事後活動2組織の統合に関わりIYEO設立に携わりました。阪神大震災時、IYEOによる避難所支援活動のコーディネートをを行ったこともありました。お金の話で恐縮ですが、3万円の給料の私に100万円もの大金を使ってくださった国への恩返し、という気持ちが私自身の原動力になったのかと思います。

大河原:事後活動歴45年のお話を5分間でお話してくださいという無理なお願いをいたしました。ご本人からはお話がなかったのですが、実は酒井さんはIYEOの会長も経験されていらっしゃるんですね。いろいろな活動をされたお話を聞くと、皆さんも事後活動の幅の広さ・可能性を感じたかと思います。

山崎:様々な活動をしてきましたが、中でも力を入れて取り組んできたのは、この「日韓交流連絡会議」の立ち上げとその運営です。2003年夏、僕らの韓国派遣1周年を記念した同窓会を、せっかくだから韓国でやろう！せっかくやるなら、他の派遣年度の方々にも声をかけて、大きなことをやってみよう！という小さなアイデアから生まれたのが、日韓交流連絡会議です。2004年に念願の第1回日韓交流連絡会議を開催した後、2006年には、連絡会議を更に発展させ、継続開催を担保するための事務局設立に奔走しました。東南アジア青年の船の事後活動であるSIGAの事務局長に話を聞いたり、IYEOの役員に相談したりと、大変ながらも楽しいステップでした。「同じ目的を持った仲間と何かを作り上げていくこと」の楽しさや喜びを胸いっぱい感じられる、そんな時期でした。

大河原:一人の小さなアイデアが大きな形として実現したのは、とても素敵なことですね。まさに事後活動の醍

面白いと思います。では、パクさんに韓国での事後活動についてお話いただければと思います。

パク: 日本では事後活動が昔から盛んですが、韓国では事後活動への取組を始めたのは最近のことです。交流事業を運営しながら、事後活動についての話をしていたのですが、参加青年が自主的に集まり会議を開きました。日本に派遣された既参加青年だけでなく、他の国へ派遣された参加者が集まり、「キオスク イクミ」という集いを作りました。キオスク イクミが重点的に実施している部分は、外国青年が交流事業で訪韓した時、IYEO の地域メンバーがされているように、プログラム企画に参加できる部分を拡大しようとしています。また、次年の参加者への事前研修をする際に、どのような研修が必要か等、彼らの意見を取り入れています。次年の参加者を選考する際に、既参加青年が面接官となり、参加者の立場で、交流事業で上手くやっていけるかどうかを見ることを行っています。これからも日本と協力しながら、事後活動を広めていきたいと思っています。



大河原: 韓国ではキオスク イクミが事後活動組織として活動できるのは、彼らの活動を女性家族部と青少年交流センターが支援しているおかげだと思います。今後も、日韓交流連絡会議のように、韓国と日本の事後活動組織が協力していけば、様々な活動に繋がっていくのだと思いました。

チョン: 山崎さんと同じように、私の活動の中心も日韓交流連絡会議で、韓国でずっと進めてきました。最初は先輩たちにやるようと言われて始めたのですが、もちろん自分もやりたかったし、楽しみながら進めてきました。私が韓国にいなかった08年度連絡会議と日本で開かれた09年度連絡会議以外で、05年から昨年までずっと企画から進行までやってきました。また、05年度後輩団員から今年団員まで派遣前研修に携わり、キオスク イクミが作られる前から、日本だけでなく他国への派遣団員の全体行事にボランティアとして活動しています。日本だけでなく他の国から韓国に招へいされる団員とのプログラムにも参加しています。05年愛知県で開催されたエキスポにも韓国館でIYEOメンバーとともに韓服を試着するイベントをし、韓国と映像を繋げて交流する企画も実施しました。09年はオーストリアで開かれた青少年政策関連カンファレンスで会ったトルコ人が、その年派遣団員で訪韓して彼と再会したこともありました。今年は韓国派遣の日本団員とスタッフとして楽しい時間を過ごしました。

大河原: 日韓交流連絡会議を韓国側でずっと長い間支えてくださいました。また、他国の青年たちとの交流を広げていく、交流事業参加後、人々とのつながり、ネットワークが広がっていき、そこで得るものの大きさというのが交流プログラムの意義あるところだと思います。皆さんの活動を報告していただきました。長い間交流事業を続けていくのは簡単ではないかと思いますが。いろいろな楽しいこと、つらいことがあったかと思いますが、もう少し具体的にエピソードをお伺いしたいと思います。

山崎さんからとジウォンさんから日韓交流連絡会議が作られるまでの事をお伺いします。

山崎:様々な苦勞がありました。日韓での事業の進め方の違い等があり、戸惑いや意見の対立もあつたりしました。例えば日本側はカチッと枠にはめた事業にしたい、韓国側はもう少し柔軟性を持たせたほうが良いといった感じの意見の違いがありましたが、結果的には意見の違いがあつて良かったと思っています。異なる文化や考え方を得る、そこから何かをつくりだしていくことを学びました。立ち上げた時には実行委員を毎年募集して行っていました。事業の継続性を確保するために事務局を作りました。事務局運営には課題が残っていますが、今後も取り組んでいきたいと思っています。20代前半に「やりたい!」という気持ちだけで、これだけの事ができるんだと確信が持てたことは良かったと思っています。

チョン:日本の場合はIYEOや推進センターなど大きく公式化された体制ができていますので、何かする時に支援が受けられますが、韓国は団体ではなく個人の力で場所をとったり、運営していくので、いろいろな困難がありました。山崎さんの話にあつたように、韓国人と日本人の考え方・やり方の違いがあります。韓国団員はのんびりと大丈夫だ出来るよといった感じで、日本団員は正確な時間や日程で行動をする。違いを一つのものを作るために努力し一緒に働きながら、両国の方式にお互いの長所を融合させて、事業を進めていけたことは良かったと思います。仕事が辛くても、友人に一年に一度会えるという喜びで続けていけると思います。韓国でも実行委員を毎年決めているので、継続性に欠ける部分はあります。また、参加者の期待値がだんだん高くなっていき、今年はプログラムで何をしようかと企画する時、決定するまでとても時間がかかります。これは去年やったとか、これは何年か前にやったとか、これは面白くないとか、いろいろな悩みがあります。多くの人の意見をいただき、新しいプログラムができたらいいなと思います。

大河原:お二人とも感じていたのは、日韓交流連絡会議の開催にあつての両国のやり方の違いでしたが、お互いのやり方を認め尊重し協力しあふことで、国際的な事業を進めていくことができるという素晴らしいサンプルだと思います。私たちIYEOの経験から、個人でもできることと、組織だからこそできるものの差を実感していますが、韓国のキョスクイクミの体系化、組織化が進み、より活動しやすい環境になることを期待しています。

それでは、最後の質問に移ります。これまでの活動経験を踏まえ、今後さらに事後活動を深めるにあつて、何ができると思いますか?具体的な案があれば聞かせてください。また、フロアの方へのアドバイスがあれば聞かせてください。

パク:私からは事後活動発展のための交流プログラム内容について考えてみました。日韓両国で事後活動の重要性は認識していますので、参加者がプログラム参加後、事後活動を実践できるように、交流事業の中で、事後活動に対するインスピレーションやアイデアを参加者に提供できる部分が強化されれば良いと思っています。例えば、韓国のプログラム中に青年社会的企業を訪問して、社会的企業家が問題意識を持って企業を発展させるまでの過程を見せることで、参加者が漠然と持っていたアイデアをより具体化することができます。このような部分が強化されるならば、事後活動も一層発展すると思います。私もプログラム運営者として努力していきます。

大河原:プログラムを作るときに事後活動のきっかけをつくるような視察先やプログラム構成を考えるというのが事

業運営側としてできることだというお話でした。

チョン:日韓合わせて毎年 60 名の派遣者がいます。新しいメンバーをケアし、教育し、私たちと共に活動できるようにするプログラムが必要ではないかと考えます。Facebook などの SNS を通してプログラムを発展させることもできるのではないのでしょうか。長年、連絡会議を運営してきた者として望むことは、日韓共同で公式的な事業を始めることも可能なのではないかとということです。日韓で一つの団体を設立する、また日韓が協力して社会貢献的な事業を行うことにより、事後活動を発展させ、本体事業にも役に立つのではないかと考えています。

酒井:日韓の関係に絞ってお答えします。日韓は「近くて遠い国」と言われてきましたが、今や「近くて近い国」になり、その利点をいかすべきだと考えます。具体的には、瞬時にいろいろな情報を共有できる Facebook などを利用した交流も大切ですが、この連絡会議のようにお互い顔をあわせる、Face to Face の付き合いを大事にすることです。それが日韓の距離の力がなせる事だと思います。IT に偏りすぎずに、直接会うことによって、歯に衣を着せずに率直な意見交換ができると思います。最終的には事後活動を単なる事後活動に終わらせるのではなく、派遣本体活動以上のものにするのが、私が描いている「夢」です。皆さんの力で、私の「夢」を「正夢」に変えてくれませんか？もし、私も加えてもらえるのなら、一緒にやりませんか！と思っています。

山崎:私も自分の夢について話したいと思います。一つエピソードを紹介すると、初めて友達になった韓国女性の話です。彼女が「自分は日本が大好きで日本語も勉強しているが、そのことを自分の大好きなおばあちゃんに話すことができない」といいました。皆さんは、それがどうしてか分かりますか。過去の日韓関係の当事者であるおばあちゃんは、日本を非常に嫌っていたそうです。この話を聞いた時に、僕は一生をかけてでも「日韓の未来造り」をしよう！と心に決めたのです。過去の歴史上の日本や韓国への認識があるけれど、これからは新しい日韓関係、相互理解と友好に彩られた日韓の時代を構築することで、僕らの子どもや孫の世代には、躊躇せずに韓国が好き、日本が好き、と言える時代にしたいと願っています。とりとめのない絵空事のように聞こえるかもしれませんが、僕は今ここに 60 名もの日韓の仲間達が集っている、そうした一つ一つの小さな交流の積み重ねが、新しい時代を作ると確信しています。これからも「日韓の未来造り」をテーマに、日韓交流連絡会議を軸に据えながら、来るべき日韓の新しい時代のために力を尽くしていきたいと切望しています。日韓の交流の歴史は 2000 年になりますが、その最前線にいるのは私たちです。

大河原:日韓の新しい関係づくりにおいて、リーダーになれるような人材がこの会場には集まっていると思います。4 名の方の貴重な話と素敵なエピソードをお伺いしてきましたが、事後活動の大切さは全員共通の話題でした。

では、酒井さんから、事後活動の大切さ、またここにいる若い方たちに事後活動を行う仲間になってほしいという観点から、総括でお話ください。

酒井:さきほど私の夢を話しましたが、その夢を現実にするためのアイデアをお話します。一つ目は連絡会議事務局の体制確立です。今は日本側にしか事務局がないので、事務局を韓国と日本の間につくりたい、事

事務局を常時設置し、事務局長は一人でもいいかもしれませんが、議長さんや会計を日韓一人ずつ選んでもいいし、何年かごとに日韓交互に遷都して連絡会議を開くなど、活動のベースになる組織の確立をしたということです。二つ目は、この連絡会議を本体事業のものにするために、青年の手による日韓交流の新しいスタイルの確立です。今回の連絡会議はオリセンを舞台に一か所だけで展開しています。昨年、一昨年、韓国でも一つの会場だけで行われました。日程を延長したり、もしくは同じでもいいのですが、日本や韓国の現状をより深く知るために、もう一つ工夫しませんか。SIGAJapan では東日本震災の被災地支援の活動をしました。たとえば、ボランティアとか、社会貢献企業訪問とか、ベンチャー企業訪問とか、ワークキャンプとか、もう一步踏み込んで、日本や韓国をより深く知るプログラムを交流会議に入れることを提案したいと思います。

大河原:酒井さんから事後活動を本体事業以上のものにするための具体的な提案をお聞きました。補足ですが、今年の5月に日本で開催された東南アジア青年の船の総会(SIGA)では、陸前高田市で社会活動を行うオプションがありました。毎年、東南アジア各国持ち回りで開催しますが、社会貢献活動や企業訪問や地域を知ることができる活動がプログラムに組み込まれています。また、世界青年の船の総会においても、必ず社会活動、企業訪問、学校訪問、恵まれない人たちの施設訪問するプログラムがあります。日韓連絡交流会議においても、外に目を向け、再会の喜びにプラスワンとして何か考えるのもいいと思います。



山崎:酒井さんのお話は、事務局長として私がお伺いしたかった話であり、良いアイデアを頂き、ありがとうございます。事務局体制の強化や今後の連絡会議の方向性について、8年以上も一緒に運営に携わっている私の良きパートナーであるジウォンさんと早速話し合っていきたいと思います。

チョン:皆さんそれぞれ仕事をしていたり、状況が違うので、すべての人が求めるプログラムを作るのには限界があるだろうと事業運営者としては思っています。しかし皆さんが望むのであれば、酒井さんがおっしゃったことも可能ではあると思います。日韓の事務局の体制強化も話し合いながら進みたいと思います。日程調整やプログラム構成も話し合いながら進めていけるとと思います。参加者の声もいかにしながら作らなければならないと思います。

大河原:ボランティアとして関わるので、仕事や勉強との兼ね合いがあり、すべてのアイデアをすぐに実現することは現実的ではありませんが、出てきたアイデアのために、どのように時間やお金の工面をするのかを話し合うのに、事務局体制がしっかりしていれば意見交換が上手くいくのではないかと思います。また、これらのことを実現するには皆様からの多大の協力が必要になるかと思っています。それでは、皆さんからの質問も受けたいと思います。

質問者:とても感動的な話、ありがとうございました。

日韓連絡会議終了後にどのように総括・評価し、次につなげているのか、継続的に発展させていくために必要なことなどをお話してください。

山崎:終了後は皆さん日常生活に戻っていくので、適切な評価ができていない現状ではあります。今後、評価し、次のアクションを起こすことが大事だと思っており、報告書としてまとめるとか、あらかじめ来年の工程を決めていくとかが必要になると思います。今後の課題としてやっていきたいと思っています。



大河原:課題はありますが、9年間この連絡会議が継続されてきたことは意義があると思います。今後の継続のために皆さんが知恵を出し合って、協力していただけることを望みます。時間の都合でこれ以上の質問が受けられないのですが、パネリストの方は豊富な経験がありますので、空き時間にでもいつでも個人的に聞いてみてください。

この後、分科会での話し合いになりますが、このパネルディスカッションの話が少しでも皆さんにインスピレーションを与えることができれば嬉しいです。組織で動くことによって更に大きく可能性が広がるということを頭に置きながら、活発に話し合っただければと思います。「こんなこと出来ないのではないか」と最初からあきらめることなく、いろいろな意見・アイデアを持って協力していけば、大きな発展に繋がるということは、この連絡会議が証明していると思います。どうぞ、皆さんいろいろなことにチャレンジしてってください。

それではパネルディスカッションを終了致します。

分科会

■分科会

パネルディスカッションの報告を受け、分科会では自分たちの「気づき」を言葉にしながら共有していく中で、より具体的な提案内容を目指した。参加者は以下の二つのテーマに分かれ、ディスカッションを行なった。

(1) 新しい日韓交流プログラムの企画

日韓の新しい「気づき（相互理解や友好促進）」を得るために、どのような日韓交流プログラムがあれば望ましいか。この分科会では「気づき」をテーマに、具体的な日韓交流プログラムの企画を行なった。

(2) 事後活動の「築き」

これまでの国際交流経験をいかし、今後の日韓交流をより発展・促進していくための事後活動を「築く」。実際に実行に移すことも考慮に入れ、具体的で実行性のある事後活動を企画した。



分科会報告

A チーム

A チームでは、日韓事業参加者のほかに、ホストファミリーとして外国人青年を何度も受け入れているメンバー、海外でのホームステイ経験のあるメンバーなど、さまざまなバックグラウンドをもつメンバーが集まり、日韓交流を深めるプログラムのあり方について議論しました。

はじめに、国際交流に関心をもつようになったきっかけを紹介しあったところ、10代の多感な時期に外国人と接したり海外を訪れたことから、言葉が通じなくてもスポーツや音楽を通してコミュニケーションを図れた時の喜び、異なる視点から自分の国をみるおもしろさ、を知ったという話が聞かれました。

さらに、国際交流を続けてきた動機としては、一度きりの出会いで終わらない一生の友達を作りたいからという声が強く聞かれました。こうした意味では、日韓は隣りあう国であることから、長く付きあえる友達を作るには大変有利である一方、隣りあってきたからこそ、長い両国関係の中で今日も難しい問題を抱えています。こうしたことについて、日本人、韓国人を含むメンバー全員で正直に話し合った結果、日韓の一生の友達を作るためには、どんな困難も乗り越えられるような強い信頼関係を築くことが重要であると考え、これをプログラムの目標とすることにしました。

次に、プログラムの内容を検討するにあたり、メンバーそれぞれの心に残る経験を紹介しあいました。一緒にゲームやスポーツをして、気恥かしさや言葉の壁を越えて仲良くなれたという話。日韓事業において、両国の踊りを披露しあった夜の集いが、心が1つになって感動的だったという話。以前の日韓交流連絡会議において、撮影した写真をもとにストーリーを組み立てるという共同作業が楽しく、出来あがった作品も感動的だったという話。これらから、日韓青年が共同作業を行う時間を持つこと、そしてその時間はできるだけ長いほうが完成したときの感動が大きいこと、そうして得られた一体感が信頼関係につながっていくことを考えました。

こうした議論を踏まえ、A チームは具体的なプログラム案の代わりに、「日韓青年が共同作業を行う」というプログラムのグランドデザインを提案しました。共同作業としては例えばダンスなどを想定しています。このプログラムには次の3つのポイントがあります。第一に、プログラムの目的は、一生の友達を作るため、どんな困難も乗り越えられるような強い信頼関係を築くこと。第二に、その方法として、両国が別々に踊りを披露するようなかたちではなく、日韓青年が共同して1つの作品を作り上げること。第三に、SkypeやFacebookなどのツールを用いながら、出国前の事前研修の段



階から日韓青年がやり取りをし、共同作業(練習など)を開始することです。出国前からツールを通じて共同作業に取り組むことで、派遣時によく face to face で日韓青年同士が出会えたときの喜びは大きなものとなると思われまます。

このようなプログラムを通じて、毎年日韓青年の信頼の輪が新しく広がっていくことを願いつつ、私たち自身もこれまで築いてきた日韓青年の信頼関係を一層深めていけたらと思います。

B チーム

分科会 B では、日韓の新しい「気づき」を得るための具体的な日韓交流プログラムの企画を行いました。企画をする際は、まず分科会メンバー全員が同じ目的地(ねらい)を認識した上でどうやって行くのかという具体的なアプローチ(プログラムの活動内容)を考えた方がいいということになり、そこからディスカッションが始まりました。

初めに、「気づき」という言葉だけでは漠然としているので、全員がこれまで国際交流プログラムに参加したきっかけ、何を求めて参加し、何を得られたのかといったそれぞれの「気づき」を、事例を交えながら共有しました。キーワードを挙げていくにつれ、そこから「先入観がなくなった／偏った見方がなくなった」、「気持ちの距離感が縮まった」という大きな二つの柱が見えてきたので、その「気づき」を得てもらいたいというねらいを達成できるようなプログラムを考えようということになりました。

ねらいが定まったところで、次は具体的な活動内容に落とし込んでいきました。その中で、韓国派遣(日本派遣)参加者は「新しい」という言葉から、自分が参加した派遣プログラムで既に行っているもの以外にしなければという感覚があり、悩んでいたようです。その際に、韓国派遣(日本派遣)参加者以外から、むしろ同じような活動内容であっても、ねらいや視点が異なれば「新しい」のではないかという意見が出て、それぞれの立場からのアイデアが出てくることによって議論が活発化したように感じました。

最終的に分科会 B では、2 国間の交流と比較を通して「気づき」を得て、その「気づき」をスライドショーで共有し、帰国後も製作物交換などでお互いの気持ちを共有することでこれからの「築き」につなげていくという日韓交流プログラムを企画しました。もちろん調整すべきことは多く、実現までの道のりはとても大変だと思いますが、まずねらいや目標をきちんと持っていれば、活動内容が多少異なることがあっても軸がぶれることはないという意見が多く挙がりました。

今回のディスカッションを通して、自分たちがこれまでに国際交流プログラムに参加して得た「気づき」を、今度は次の参加者に得てもらえるように貢献したいという思いが全員の中に強くあることが分かりました。そして、そういう思いを持った人がいるからこそ、これからの築き→気づき→築きというサイクルは出来ていくのだと確信できる分科会でした。



C チーム

私達のチームは、交流連絡会議をどのようにしていけばいいかということに対して話し合いました。まず、ディスカッションを聞いた上で現状組織の問題などについて話をしたあと、実際のプログラムについてどのようなものがあればいいか提案を行いました。

議論の中から、以下の様な問題点が上がって来ました。

- ・韓国側に事務局組織がないために、日韓共同事務局の設立が必要だということ
- ・実行委員会形式となっているため、前と次のコンセプトなどがつながりにくいということ
- ・連絡会議の意義、目的が不明瞭となっているため、参加者の統一された意識がないこと
- ・以前の会議の内容が不明で報告書などの文書として残されていないこと
- ・それゆえ引き継ぎなどが十分になく、ナレッジの継承がされていないことなど
- ・アンケートなどを取るものの、その結果が次回に反映されていない
- ・効果測定などがなされていないため、定量的なデータがなく、次回の実行委員が感で仮設立案を行わざるをえないということ
- ・アンケート結果に関しても参加者へのフィードバックがない
- ・現状参加者の意識が2年前のアクションプランなどを作成する体制に変わった以前の連絡会議に対するものとなっているため、ギャップが生じている
- ・会議によって参加者が何を得られるということがないと、参加者が減り続ける一方になるのではないかとということ
- ・みんなで行動を共にして体験する、共有できるものを作っていくことが最も良い経験になるのではないかとこと
考えから、開催地でしか経験できないことをオプションではなくプログラム本体に入れることが必要だということ

そこで出てきた問題点から、プログラムの内容の提案を行いました。実際には、実現性などを十分考慮して細かいレベルまで落としこむことが必要ですが、来年の実行委員のことも考えた上で、あえて細かなところは省いています。来年 10 周年を迎えるので、派遣では絶対に行くことのなかったチェジュ島でやる案もできました。

重要なのはアイスブレイキングとして、

- ・学びのあるもの
- ・グループ対抗
- ・人と話せるもの
- ・性格が出るもの
- ・グループ単位で

というところが重視されたプログラムが良いのではないかと



協同体験として

- ・持ち帰るもの(伝統工芸などの体験)
- ・団体だからできること(企業訪問・工場訪問)
- ・自然の中で バーベキュー、キャンプ、登山

テーマ別に体験へ行き、そのあと1時間程度気づきや、日韓の文化の違いを発表し合う事が学びにつながるのではないかと提案を行いました。この提案を活かして、よりよい日韓連絡交流会議が開催されることを願っています。

D チーム

私たちは事後活動の「築き」というテーマをもとにディスカッションを行いました。

最初に、全員「交流事業に興味を持ったきっかけ」を話しました。キャンプリーダーや姉妹都市交流、トップギ、歌手、ドラマなど、小さい頃の経験や身近にあるモノが“はじめの一步”になっていることが分かりました。

そして、交流事業に参加した経験踏まえ、何をやりたいか、何ができるか、ということと話しました。地方にいると様々なイベントがあっても参加しにくい、ローカルな集まりが欲しい、派遣から時間が経っても、就職しても戻ってきやすい環境が必要、市民レベルの交流が大事などたくさんの意見が出ました。

では具体的に何ができるか、と考えました。この連絡会議中はずっと盛り上がるのですが、その時だけとにならないように、集まる機会を増やしていこう！ということになりました。さっそく、カッチモゴ、カッチマシヨの会を企画しました。

集まる機会を増やしていこう！とまとまるまでに、この連絡会議の在り方についても話しました。この場でできることは？ここでしかできないことは？目的の見直しが必要？

この会議でできることには限界があるが、逆にこういう場があるから、次に繋がっていくことを確認できました。

今の日本が、この事業の結果・評価を求める傾向がかなり強いですが、この会議でできることには限界があります。なので、草の根・市民レベルの交流が大事ということのみんなで共有できました。

来年は、この連絡会議が10年目を向かえるので、転換点に来ているのかな、とも感じました。



E チーム

E チームのテーマは「事後活動の『築き』」。構成メンバーは「日本・韓国青年親善交流」事業の OB・OG に留まらず、今年度の同事業参加予定者、韓国青年招聘事業の既参加者など多岐に渡っており、その分多角的・多様な視点から、事後活動について討議することができました。

ディスカッションの前半、私たちはこれまでの事後活動において課題となっていること、事業参加後に課題と感じていることについて意見交換をしました。事業参加の経験・日韓交流の経験をどのように活かしていけば良いか分からない、地方に住んでいることでなかなか活動の幅を広げるチャンスがないと感じている、等の意見が出されましたが、中でも特に目立った意見は「“つながり”を維持していくことの難しさ」でした。これは日本青年と韓国青年との“つながり”、日本青年同士・韓国青年同士の“つながり”といった様々な単位でのつながりを意味します。Facebook 等の IT ツールが発達している今だからこそバーチャルにつながる機会はあるにしても、やはりそれだけでは交流活動の最も楽しい部分である、フェイス・ツー・フェイスのつながりを維持していくことは難しく、またせっかく交流活動で得たきずなを継続させていかなければもったいないとの意見でした。

ディスカッションの後半は、こうした“つながり”を維持していく方法について、具体的なアイデアと共に意見交換を進めました。この日韓交流連絡会議のような定期的なイベント・事業の開催は非常に有効だという意見、日韓交流連絡会議の分科会のような位置づけでテーマ性を持たせたイベントを開催してはどうか、といった意見が出されました。そうした中で私たちが考え出したアイデアは、「共通のテーマを持った、日韓交流連絡会議公式サークル」の設立です。例えば、旅行やボランティア、グルメ、就職活動といったひとつのテーマを決め、それらのサークルに所属することで、漠然とした「“つながり”の維持」といった課題に、具体的で意味のある特色を持たせることができます。また、実現性を担保するためにサークルのテーマはできるだけ具体的で、参加者の興味・関心を惹きつけるものである必要がある、ということも話し合われました。

私たちは、来年の日韓交流連絡会議に向けてこれらサークルのテーマをより具体化し、様々なテーマを軸とした“つながり”を継続していくことを目指していきたいと考えています。



第9回日韓交流連絡会議が目指したもの

第9回日韓交流連絡会議 副実行委員長

末岡 聖史

1.はじめに

第9回までに至った日韓交流連絡会議(以下、連絡会議)だが、回数を重ね参加者の多様化とともに、その意義は参加者それぞれに異なるものとなっているのではないだろうか。本稿では、第9回連絡会議が目指したものを中心に、連絡会議の経緯などにも触れ、これからの姿を考察する。

2.連絡会議開催の経緯と企画・運営体制

連絡会議は、2003年に予備会議、2004年に第一回連絡会議が開催された。当初は同窓会をやるなら、他の年度もあわせて集まろうということから始まった。そのため、一泊二日で、前泊は任意とし、前泊日は年度ごとの交流時間、それ以降で全体の交流、という開催年度もあったと記憶している。近年の2010年、11年の開催では、参加者同士の今後の活動(=アクションプラン)を考えるという内容であった。また、2009年の日本開催や、両国政府の後援、関係者を来賓として迎えるなど、回数を重ねるごとにその内容も変化してきている。

連絡会議の企画運営を行う実行委員は、開催当初は日韓合同で、前年の派遣年度を中心に行っていた。その後、連絡会議事務局が設置され、日韓両国で開催することを目指し、開催国で実行委員体制を組んできた。

3.第9回日韓交流連絡会議が目指したもの

2012年の連絡会議は日本開催となること、また、日本青年国際交流機構(International Youth Exchange Organization of Japan 以下 IYEO)の主催行事となることなどから、IYEO 役員を中心に実行委員体制を組むこととなった。開催にあたり主要関係者で検討した結果、特に以下の点をより強調することを事前に確認した。

- ・日韓派遣 OB・OG 以外の参加者、連絡会議初参加者にもわかりやすいプログラムであること
- ・参加者同士が刺激を受け、より積極的に事後活動へ取り組む姿勢となること

これは、前述のアクションプランを日韓相互で継続させることよりも、より発展を目指し、これまで活動してきている方々からの刺激を受け、参加者同士が今後の活動を広く考えていくことを重視したためである。

この方針をもとに、実行委員会で検討したテーマも【これまでの「気づき」を、これからの「築き」へ】という方針に沿うものであった。このテーマのもと、パネルディスカッションや分科会といった各プログラムを企画し実施した。個人的には、ある程度成果が得られたのではないかと感じている。

4.これからの連絡会議

パネルディスカッションではこれからの連絡会議を考える上で、多くのヒントを得ることができ、刺激となったと思う。今回の分科会では、具体的な提言に対し、実現にむけた計画までは議題としなかった。それは連絡会議の場で答えを出すのではなく、今後、私自身も含めた参加者同士の活動により導かれるものだと思うからである。それぞれの活動を持ち寄り発表し合い、そこから刺激を受け、新たな活動の源となる。連絡会議がそういった場となることも、これからの連絡会議のひとつの姿ではないだろうか。

最後に、連絡会議が成功裡に開催されたことに対し、両国政府及び実行委員、参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

アンケート

I.第9回日韓交流連絡会議はいかがでしたか？

とても良かった	40%
良かった	55%
普通	5%
悪かった	0%
とても悪かった	0%

- ・ 初対面の方ともプログラムを通して明るい雰囲気でごせた。
- ・ 事業が違えども、国際交流に対する積極的な気持ちや行動は一緒であり、刺激のある3日間だった。
- ・ 日韓交流に関わる同志と集えたことが良かった。
- ・ 日韓交流事業の歴代の参加青年の方々に加え、今年の参加青年、つどいや違う事業への参加の方々とも一緒にプログラムに参加できたことが良かった。

II.各プログラム評価

17日(金)夕食会

とても良かった	16%
良かった	58%
普通	26%
悪かった	0%
とても悪かった	0%

- ・ 初めての人も心理ゲームなどがあって話しやすかった。
- ・ 韓国人も日本語が話せたので、交流がスムーズだった。
- ・ グループ分けが後のアイスブレイキングにいかされるとより良い。
- ・ 何度もグループを変更して、自己紹介をしても、すぐ変わっていったので、覚える余裕がなかった。
- ・ 参加者全員が揃う最初の時間だったので、自己紹介のゲームみたいなものがあればもっと良かったかなと思う。

17日(金)レクリエーション

とても良かった	30%
良かった	45%
普通	15%
悪かった	10%
とても悪かった	0%

- ・ 言葉の要らないゲームで共通点を見つけることができて良かった。

- ・ 二人一組、三人一組、さまざまなグループに分かれていろいろな人と接する機会がありとても良かった。
- ・ ユニークなゲームがたくさんあり、自然と皆と打ち解けられた気がした。
- ・ グループ対抗や人と話せるプログラムになっていけばより良かった。
アイスブレイキングではあるが、ペアを組んだ人と話をする暇もなく次々とペアを組むという流れだったので、消化不良に感じた。

18日(土)パネルディスカッション

とても良かった	56%
良かった	44%
普通	0%
悪かった	0%
とても悪かった	0%

- ・ 「気付き」を「築き」に変えていく為の多くのアイデア、インスピレーションをいただいた。
- ・ 事業に参加した同じ立場の人間であるにも関わらず、取り組みに対する意欲や行動に、大変刺激をうけた。
- ・ 日韓交流連絡会議に参加したからこそ経験できた、よいプログラムだった。
- ・ 質問が明確で、パネリストの方々も分かりやすく話してくれたので、聞きやすかったです。
- ・ 知識があり、熱い想いのある方々の話は感動に値するものであった。モチベーションがとても上がった。
- ・ 日韓派遣に参加していない人もいたので、その後の分科会に向けて知識や考えを共有すると言う意味でも大事だったと思う。
- ・ 参加者と壇上の方との言葉のやりとりがあれば更に良かったと思う。

18日(土)分科会

とても良かった	39%
良かった	44%
普通	11%
悪かった	6%
とても悪かった	0%

- ・ 参加者として今後の連絡会議についてお互いの意見を具体的に話すことができた。
- ・ 参加者の意識の高さが発揮される場だった。私自身ものすごく考えさせられ、成長をしなければいけないなと思った。
- ・ 皆、思いは強く白熱した議論、意見交換をすることが出来、大変充実した時間だった。
- ・ 深く話し合い、結論まで導き出したので、とても充実した時間だった。
- ・ 今回考えたこれからのプログラムが机上の空論にならずに反映できるようにしなければいけないと思った。
- ・ コーディネーターのおかげで、討論がスムーズに出来た。限られた時間であり、事前準備も共同で出来なかったもので、深くまでは討論できなかったことが課題。
- ・ 派遣の時のような、内容の濃いディスカッションを期待して参加していたので、期待外れになってしまった。

18日(土)夕食会

とても良かった	44%
良かった	33%
普通	17%
悪かった	6%
とても悪かった	0%

- ・ 明るい雰囲気での交流が図れたことが良かったと思う。
- ・ 全体に打ち解けた雰囲気、たくさんの人と話すことができて良かった。
- ・ グローバルビンゴが話のきっかけになり良かった。
- ・ 話せなかった人たちとも話せ、貴重な時間を過ごせた。
- ・ 楽しめたが、せつかくの最後の夜なので、歌や踊りなど、もっと盛大にやりたかった。
- ・ みんなが交流できるよう、ビンゴがあったのはよいが、カフェフレンズでやった意味は感じなかった。
- ・ 会場が狭く、椅子に座りきれない印象だった。完全立食か、数人ごとのグループでテーブルを囲む形式にした方が交流を深めやすいのではないだろうか。

19日(日)共同制作

とても良かった	25%
良かった	40%
普通	30%
悪かった	5%
とても悪かった	0%

- ・ 参加者の思わぬアイデアが反映されたり、みなさん積極的に参加してくださったので非常にスムーズにできたことに感動した。
- ・ 形にのこるものと、もって帰れるものというコンセプトは良かった。
- ・ エコバッグは思い出にもなり、良かった。グループごとにエコバッグを作成できればよかった。
- ・ 日韓で一緒にやる意味を感じられるものがよかった。製作過程でもっと交流できればよかった。
- ・ 最終的な結合作業も実行委員のみで完結しており、実行委員のひとりよがりで行われている感が否めなくて残念だった。
- ・ すぐ作れるものだったので、グループで個性を出してもいいとか、工夫できるものだとさらによかった。
- ・ 空いている時間が長くなってしまったので、共同という意味では少し足りなかった。

III. 今回の連絡会議でもっとも良かった・嬉しかった・楽しかったことは何ですか？

- ・ パネルディスカッションで、これからの連絡会議の方向性が見えたこと。
- ・ パネルディスカッションから分科会へつながりをもって臨めたことで議論が更に深まり、新たな気づきを得た点。
- ・ 参加者同士の交流が多くできたこと。

- ・ 多くの方と知り合えたこと、刺激を受けた。
- ・ 世代と参加事業を超えた IYEO の仲間に出会えたこと。
- ・ 何よりも新しい出会い！同じ事業の通して多くの先輩方と交流でき、学ぶことが多々あった。
- ・ 同じ部屋の方々、分科会で一緒になった方々をはじめ、たくさんの方と話せて、再会や新しい出会いがたくさん得られたことが一番嬉しかった。
- ・ 久々に仲間に出会えたこと！
- ・ (自分や今後の活動を)やる気にさせてくれる面白い人にたくさん出会えたこと。
- ・ 日韓交流に関わる世代、国籍を超えたつながりがもてたこと。
- ・ 久々の連絡会議参加だったが、久しぶりでも皆が楽しめるプログラムだったと思う。また参加したい。
- ・ 韓国人も日本語が話せたので、韓国のことをとことん聞けたこと。

IV. 今回のテーマは、「これまでの【気づき】から、これからの【築き】へ」でした。あなたの「気づき」とこれからの「築き」は何ですか？

気づき:素晴らしい仲間がいる！

築き:さらに交流を深めたい！

気づき:会議参加すること、交流することが楽しいということ。

築き:ただ自分たちだけが楽しむだけではなく、社会に目を向けた連絡会議の必要性を確認できたこと。

気づき:事業が違えども、持っているもの(国際交流に対する熱い思い)は同じ。

築き:事業間の交流にも参加、企画していきたい。

気づき:仲間がいる。

築き:共に取り組める仲間がもつという。

気づき:意欲や力のいれたいポイントが違う人があつまり、何年も継続して一つのことをやる大切さと難しさ。

築き:関係を持ち続けること。

気づき:IYEO の絆。

築き:友好関係。

気づき:派遣や事後活動で得られたたくさんの出会いが、だんだん疎遠になっているように感じて寂しい。

築き:これまでと今回の出会いを大切に、関係を絶やさないようにしていきたいと強く感じた。

気づき:昨今の日韓関係を考えても、改めて事業の有益さを実感した。

築き:多くの先輩方との繋がりを大事にし、事後活動にも積極的に参加したいと思った。幅広い世代のかたと交流できたことは本当に良かった。

気づき:派遣後でも変わらない気持ち。交流。

築き:これからもこの関係を大切に枝葉を広げていきたい。

気づき:表明的にしかこの連絡会議を捉えてなかった。

築き:できる範囲で、これからも。

気づき:今までの小さな活動の中からも、次につながる・経験を活かすことができる。

築き:ラーメン部、宴会芸(kPOP??)部、日韓就活・転職サークルを作りたい。

気づき:日韓の共通点は多い。外国人の中で最も通じ合えると感じた。

築き:共に生活し、語り合ったことで、世代、国を越えた強い繋がりを築いた。

気づき:韓国側の事後活動に取り組んでいこうという積極的な姿勢が見られたこと。

築き:日韓交流連絡会議事務局体制を両国青年が相互に人材を出し合うことで確立させていく道筋をつけた。

参加者及び実行委員

- 韓国側参加者

No	氏名	Name	性別	派遣年度 等
1	ジャン・ヨハン	장요한	男	2007年度 日本派遣団
2	キム・ミンジェ	김민재	男	2007年度 日本派遣団
3	キム・ジョンフン	김정훈	男	2007年度 日本派遣団
4	イ・ジュンヒ	이중희	男	2009年度 日本派遣団
5	クオン・ヒョスン	권효순	女	2010年度 日本派遣団
6	ホン・イエジン	홍 예진	女	2010年度 日本派遣団
7	ペ・ジュンソプ	배 준섭	男	2010年度 日本派遣団
8	キム・ヒョヨン	김효영	女	2012年度 国際青年交流会議ディスカッション
9	リ・ジョン	이지연	女	
10	パク・ウン	박웅	男	韓国青少年交流センター主任
11	チョン・ジウオン	정지원	男	2004年度 日本派遣団・韓国側事務局代表

- 日本側参加者

No	氏名		性別	参加事業
1	酒井 洋幸	サカイ ヒロユキ	男	1988, 2007 年度 日本・韓国青年親善交流 等
2	大谷 博美	オオタニ ヒロミ	女	1992, 2001, 2010 年度 日本・韓国青年親善交流
3	田中 南欧子	タナカ ナオコ	女	1998 年度 日本・韓国青年親善交流
4	高山 将宏	タカヤマ マサヒロ	男	2003 年度 日本・韓国青年親善交流
5	徳田 雅也	トクダ マサヤ	男	2003 年度 日本・韓国青年親善交流
6	清水 友紀	シミズ ユキ	女	2004 年度 日本・韓国青年親善交流
7	清水 智志	シミズ サトシ	男	2005 年度 日本・韓国青年親善交流ホストファミリー
8	御澤 真一郎	ミサワ シンイチロウ	男	2005 年度 日本・韓国青年親善交流
9	井上 直子	イノウエ ナオコ	女	2005 年度 日本・韓国青年親善交流
10	野口 知美	ノグチ トモミ	女	2006 年度 日本・韓国青年親善交流
11	一圓 美乃	イチエン ヨシノ	女	2007 年度 日本・韓国青年親善交流
12	岩切 秀史	イワキリ ヒデフミ	男	2007 年度 日本・韓国青年親善交流
13	永塚 陽子	ナガツカ ヨウコ	女	2007 年度 日本・韓国青年親善交流
14	中山 麻衣	ナカヤマ マイ	女	2007 年度 日本・韓国青年親善交流
15	藪内 智佳子	ヤブウチ チカコ	女	2007 年度 日本・韓国青年親善交流
16	瀧口 賀子	タキグチ ヨシコ	女	2009 年度 日本・韓国青年親善交流
17	大塚 理可	オオツカ リカ	女	2009 年度 日本・韓国青年親善交流
18	大川 歩美	オオカワ アユミ	女	2010 年度 日本・韓国青年親善交流
19	高橋 昌子	タカハシ マサコ	女	2010 年度 日本・韓国青年親善交流
20	石塚 麻莉子	イシヅカ マリコ	女	2011 年度 日本・韓国青年親善交流
21	岩崎 友徳	イワサキ トモノリ	男	2011 年度 日本・韓国青年親善交流
22	竹嶋 梓	タケシマ アズサ	女	2011 年度 日本・韓国青年親善交流
23	松本 恭子	マツモト キョウコ	女	2011 年度 日本・韓国青年親善交流
24	山崎 遥	ヤマサキ ハルカ	女	2011 年度 日本・韓国青年親善交流
25	河合 聡史	カワイ サトシ	男	2011 年度 日韓青年親善交流のつどい
26	寺西 由佳	テラニシ ユカ	女	2012 年度 日本・韓国青年親善交流 2000 年度 世界青年の船
27	山本 優衣	ヤマモト ユイ	女	2012 年度 日本・韓国青年親善交流
28	渡辺 美和	ワタナベ ミワ	女	
29	江川 菜保子	エガワ ナオコ	女	2008 年度 世界青年の船
30	住田 隆	スミダ タカシ	男	2009 年度 NPO マネジメントフォーラム
31	大橋 玲子	オオハシ レイコ	女	(財)青少年国際交流推進センター事務局長
32	久津摩 敏生	クヅマ トシオ	男	内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室 参事官 (青年国際交流担当)
33	石川 毅	イシカワ ツヨシ	男	内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室 参事官補佐 (国際調整担当)

- 実行委員

担当	名前		派遣年度・派遣事業
実行委員長	大河原 友子	日本青年国際交流機構会長	1987年度 東南アジア青年の船 2001年度 国際青年育成交流ジンバブエ派遣
副実行委員長	石崎 好章	日本青年国際交流機構監査役	2001年度 日本・韓国青年親善交流
	末岡 聖史	日本青年国際交流機構運営委員	2001年度、2008年度 日本・韓国青年親善交流
実行委員	筆谷 信昭		2001年度 国際青年育成交流オーストリア派遣
	永松 仁		2001年度 日本・韓国青年親善交流
	川嶋 伸明	日本青年国際交流機構 PR 担当監事	2002年度、2005年度 日本・韓国青年親善交流
	山崎 庸貴		2002年度 日本・韓国青年親善交流
	上田 裕也		2004年度 日本・韓国青年親善交流
	齋藤 健太		2005年度 日本・韓国青年親善交流
	戸村 祐太		2007年度 日本・韓国青年親善交流
	櫻井 彩美		2008年度 日本・韓国青年親善交流
	小原 弘己		2008年度 日本・韓国青年親善交流
	北野 芽衣		2008年度 日本・韓国青年親善交流つどい
	井口 正太郎		2009年度 日本・韓国青年親善交流
	黒川 彩乃		2009年度 日本・韓国青年親善交流
	大西 里沙		2009年度 東南アジア青年の船
	鹿島 健	日本青年国際交流機構運営委員	2010年度 日本・韓国青年親善交流
	上代 紗友理		2010年度 日本・韓国青年親善交流
	ホン・イエジン		2010年度 日本・韓国青年親善交流 招へい
	ペ・ジュンソプ		2010年度 日本・韓国青年親善交流 招へい
鈴木 香寿美		日本・ASEAN リーダーズサミット など	
大久保 正美		2000年度 東南アジア青年の船 2011年度 日本・韓国青年親善交流	